原発と福島

解除後の風景 3

「再び農家に」畑と格闘

読売新聞東京本社
福島支局
記者 相本啓太

東京電力福島第一原発事故が起きる前、福島県は全国有数の葉タバコの産地だった。阿武隈山地にある標高500㍍超の川俣町山木屋地区もその一つ。53軒の生産農家がいた。

渡辺新一(57)は父親と一緒に、山木屋で2番目に広い3・1㌶の畑を手がけた。100年以上続く葉タバコ農家の5代目。農家共通の悩みを抱えていた。後継ぎ問題だ。

頼みの長男(32)は、スポーツトレーナーを目指して専門学校に入り、卒業後は、町の臨時職員になっていた。50歳が近づき、半ばあきらめていた頃、「おやじ、腹を決めた」と言ってくれた。胸をなで下ろしたその翌年、福島第一原発で事故が起き、山木屋一帯に避難指示が出た。

◇

葉タバコの栽培は、春先の種まき、夏の収穫、秋の乾燥と続く。出荷まで1年がかり。手作業も多く、ほかの作物以上に手間がかかる。渡辺のように広い畑を手がける農家は、人手が必要だ。山木屋には幸い、親戚や知人らによる「結(ゆい)」という互助の習わしがある。気持ちばかりの謝礼で協力してくれる知人らに支えられ、渡辺は年10㌧を出荷していた。

避難指示を受け、妻、長男と福島市の借り上げ住宅に身を寄せた。味気ない日々が続いた。住民有志の防犯パトロール隊に加わった

整地した畑に立つ渡辺さん。土を再生させるには、まだ時間がかかるという（13日、福島県川俣町で）＝関口寛人撮影

が、山木屋地区を訪れると、むしろ気分が沈んだ。自慢の畑が雑草に覆われていく。長男には「ほかの仕事を探してくれ」と告げた。翌年、長男は公務員になって借り上げ住宅を出ていった。

妻は体調を崩し、通院が欠かせなくなった。渡辺は部屋にこもり、テレビを見て過ごすようになった。畑のことを考える時間が減っていった。避難指示が解除された昨春、5軒の農家が試験栽培を始めたと聞いた。「できっこねえ」。渡辺は冷めきっていた。

◇

川俣町内で避難を続けた両親が山木屋に帰還することになった。改修が始まった自宅の様子を見に行く途中、渡辺は思わず車のブレーキを踏んだ。道路沿いの畑に緑色の一角が見えた。試験栽培を始めた葉タバコの苗だった。

渡辺は車を降り、畑に近寄った。わずかな数でも、しっかり根を下ろしている。あまり親しくもない農家の男性だったが、渡辺は心の底から「頑張ってください」と声をかけていた。

山木屋に戻るたび、男性の畑に足が向いた。5月には大きな葉をつけた。葉に栄養を集めるために、花を摘む「芯止め」の時期だ。「収穫まで虫食いに気をつけなきゃな」。体にしみついた作業の一つ一つが、渡辺の気持ちを熱くした。

こらえきれず渡辺は、自分の畑に手を入れ始めた。葉タバコ栽培を再開できると考えたわけではない。帰還は進まず、「結」には頼れない。試験栽培に参加した5軒のうち、2軒は結局、廃作を決めたと聞いた。それでも思った。「みんな一歩ずつ進んでんだ。おらも動かなきゃならねえ」

荒れた畑で一人、格闘した。雑草を取り除くと、でこぼこの土が顔を出した。除染のため表土をはがし、土を掘り返したせいだ。くぼみにたまった水を抜き、トラクターで整地すると、イノシシがミミズを探して荒らしまくった。作業が一段落したのは、雪が降り始めた頃だった。

まだ肌寒さが残るこの春、渡辺は土地を見渡した。納得も満足もしていない。「こんなの、まだ畑とは呼べねえ」。渡辺はうずうずし始めている。葉タバコでなくていい。早く農家に戻りたいのだ。（敬称略）

取締役に

JR西

台車枠 超音波で検査

新幹線 微細な傷発見に有効

康所長は「検査のあり方が不十分だったと痛感している。安全確保に向けて努力